

春の草孤独がわれを鍛へしよ

藤田湘子

「鍛金」と呼ぶ金属工芸がある。銅や銀の平板を円形に切り抜き、バーナーで真っ赤に焼鈍やきなました後、真ん中から外へと叩いてゆく。一度叩くと金属は硬くなるので、また焼鈍して当金あてがねと金槌だけで、カチンカチンと鍛き続ける。この工程を何十回も、時には何百回も繰り返すと壺や花瓶・動物の置物へと変わってゆく。表面には、金属の槌目がその痕跡として残る。どんな仕事もそうだろうが、完成品にはその苦勞の跡はほとんど見えない。

鷹俳句会も、今は千二百人（内同人約六百人）以上の結社である。しかし、設立当初、秋櫻子に誤解され、創立同人たちが一斉に脱退した。湘子先生の孤独の時代を思うと、ただただ頭が下がるばかりである。

1999年（二二作）第十一句集『てんてん』 鑑賞・轍郁摩